

## 女性研究者スピークアップ

## 柳 貞伊 (Yu Jung-Yi)さん



韓国・釜山出身。  
2010年3月に理学府・分子触媒化学  
研 博士課程修了、博士号(理学)を取得。

## 日本に来たきっかけ

私は修士課程を卒業して、PDPやOLEDで用いられる機能性材料を取り扱っている企業で働いていました。その際、あるプロジェクトの中で材料合成の仕事を担当するようになりました。しかし、合成が思った通りにできず、結局、そのプロジェクトは失敗に終わりました。その失敗から、吸収と発光の特性や、デバイスのfabrication、デバイスの効率の研究など、頭で想像している材料を実際に作ってみなければ、次の研究段階へ全く進めないことを痛感しました。また、この機能性材料研究を続けるためには、有機合成の上達が必要不可欠だと気づき、更なる勉強のために博士課程への進学を決めました。進路探しの際、有機合成の中でも機能性材料の合成時に、多く用いられているカップリング反応の研究に焦点を当てましたが、この分野についての知識が全くなく、困っていました。金属

触媒を用いた交差カップリングでキーワード検索したところ、日本人研究者の名前がついている反応が非常に多いことが分かりました。それで、この分野での研究が盛んな日本への留学を決心しました。

## 未来分子システム科学コースでの経験について

一番大変だったことはやはり、リサーチプロポーザルでした。でも、一人前の研究者になるための一歩である気がして、終わった後は達成感を感じたと同時に、独立して研究する時のスキルを学ぶきっかけになったと思います。また、G-COEの国際連携特論や様々なセミナーを通じて、全く分からなかった分野である生命科学について知識を少しずつ増やす事ができ、生命科学の研究を行っている友達の話が少しは理解できるようになりました。また、G-COEから国際学会参加助成金をもらって、去年、フランスで開催されたICOMCに参加しました。写真上でしか見ることができなかった著名な先生たちに実際にお会いすることができ、とても有意義な時間が過ごせました。また、ヨーロッパに行ったのは初めてでしたので、アジアとは異なる文化を経験することもでき、とても楽しかったです。

## 将来の夢

留学前の研究テーマであったディスプレイ用の材料研究を続けたいと思っています。修士課程の時は、有機電界発光(OLED)の材料について研究しましたが、今はOLEDテレビが売れているぐらい発展して、ちょっと悩んでいます。また、最近世界的な課題であるエネルギー研究、その中でも太陽電子の研究にもチャレンジしてみるのも良いかなと思っています。

## 藤田 友紀さん



広島県出身。  
工学府物質創造工学専攻  
博士課程3年

## 理工系に進んだきっかけ

理工系に進んだのは白衣がかっこいいなあといった憧れと、将来ものづくりに携わりたいという漠然とした思いからでした。その後、多彩な原子から多種多様な分子を生み出せる化学に魅かれ、学部を選択しました。学部3年時に受けた授業により生物の複雑さ、面白さを知ったことをきっかけに生物系の研究に関心を持ち、現在所属する研究室を選びました。

## 未来分子システム科学コース生としての経験

以下に特に印象に残っているものを挙げます。  
リサーチプロポーザル: 諮問が非常に厳しいと聞いていたので不安でしたが、実際の諮問の場では私が提案した研究に対する、研究のプロの目

から見た真摯で鋭い指摘やコメントをいただきました。なかには提案研究をよりよいものにするためのアイデアなどもあり、自身では思いつかなかったことを悔しく思う反面、先生方の発想力の幅広さに感服しました。非常に有意義で興奮する時間でした。

スイスでの滞在: 3カ月間スイス連邦工科大学へ滞在させていただきました。自身の分野と異なるフィールドで研究させていただき、新たな知識や技術を身につけることができました。また、異国での生活や現地の博士学生との交流は自身の考え方や価値観に大きく影響するものでした。

カナダでの学会発表: カナダのケベック州で行われた国際会議に出席させていただきました。著名な先生方とポスター会場や食事の席で直接お話でき、彼らの研究姿勢や研究哲学などを伺い知ることができました。私の研究分野の先駆者で今年のノーベル賞受賞者であるProf. Szostakともお話することができ、感激しました。

## 将来の夢

女性はライフイベントがキャリアに影響を及ぼす可能性があります。その可能性を加味した上であえて道の一つに定めて、ひたすらそこを進んでいくのも生き方の一つかもしれません。しかし私はもっと柔軟に生きてみたいです。「この道に進んだらこうしなければならない」といった、自身の可能性を狭めるような考えはできるだけ排除し、その時々私の興味や状況により常に最優先事項を更新し、結果的に時には研究というフィールドを離れるかもしれませんが、どんなフィールドにおいても前向きに挑戦していく、そんな人間になるのが私の夢です。博士課程で鍛えた論理的思考や行動力は、どんな環境下でも自身の武器になりえると確信しています。